

2024年「母校の桜を見る会」のご報告

2024年4月14日

目黒会首都圏総支部 総支部長 竹田智彦

担当幹事：岡村 衡、岩本茂子

増田悦夫、來住直人、西野幸博

首都圏総支部では、2024年3月30日(土)午後、暖かな晴天のもと14回目の「母校の桜を見る会」を開催致しました。今年は13時半より母校より野川沿いを経て深大寺までの散策の後、学内の桜を鑑賞し、16時よりリサージュ3階にて長野支部の古林利明氏（1978年電子工学科入学、株式会社ガクファーム代表取締役）より「この土地らしいワインを造りたい」をテーマとした講演を頂いたのち17時半より調布都内のレストラン「ウノセツテ」にてワイン試飲を含む懇親会を行いました。今年は会員の家族3名を含む27名(首都圏総支部21名、長野支部2名、九州支部1名、ご家族3名)が参加して楽しく交流を致しました。担当幹事からのレポートをご覧ください。



大学内にて

☆気分爽快、こころ満開の桜ツアー

(参加者数：野川・深大寺9名、学内9名)

今年のミニ桜ツアーでは昼過ぎに電通大を出発し、野川・深大寺方面を目指して調布市内を巡りました。桜自体は残念ながら一分か二分咲きの状況の中、大きく様変わりした母校周辺の様子に驚きつつ、河原でピクニックを楽しむ調布の方々や一面の菜の花を楽しみながら野川沿いを通過しました。また、観光地として賑わう深大寺に参拝し、観光地として大きく賑わう門前町を自由散策して満喫しました。電通大に帰着後は学内の桜の木々を巡回してツアーを終えました。(岡村衡)



深大寺にて

☆古林利明氏「この土地らしいワインを造りたい」(参加者数：対面21名、リモート4名 計25名)

古林氏は富士電機勤務と郷里の松本で翻訳業に従事後、ワイン醸造の勉強を2014年に始め、三年後に委託醸造、2020年にワイナリー設立にこぎつけた。現在は自宅にワイナリーを併設し、数々の媒体で紹介される特色あるワイン醸造を行っている。信州ではワイン醸造が身近にありワインメーカーのノウハウが使える事が壮年期の転身を後押しした模様。酒造免許取得や、多雨の日本での葡萄栽培、夫婦二人で葡萄の作付からワイン醸造まで全てを手掛けることなどの苦労や面白さ、様々な興味深い話を拝聴した。電通大では角田稔研究室で卒研に従事し、共に化学が重要な半導体とワイン醸造、そんなところに電通大卒の経歴が活かしているのかもしれない。(來住直人)



講演会集合写真

☆心地よい春の宵を満喫

(参加者数：21名)

今回は出席者最低年齢を大幅に更新したお子さんたち2名を含めて21名が出席。開宴に先立ち、講演を終えたばかりの古林先生に再びご登場頂き、ご厚意でご持参くださった1種を含む自信作のワイン3種の試飲会を開催。一同さっそく堪能し、桜を愛でた散策の疲れもあってか、さっそく出来上がった方も見受けられた。続いて、竹田総支部長より開宴の辞、三たびご登場頂いた古林先生より乾杯のご発声を頂き、歓談となった。宴の中盤には自己紹介の時間を設け、特に初対面の出席者同士の縁を深めて頂いた。しばし歓談の後、出席者最年長の山森先輩より閉宴の辞を頂き、一同名残りを惜しみつつ散会となった。桜の方は爛漫とは至らなかったものの、懇親会の方は心地よい春の宵を満喫したひと時となった。(西野幸博)



講演会場(リサーチ3階)



古林利明氏



懇親会場(ワイン試飲)



野川沿いにて